

研究のまとめ方を整理する

研究のまとめ方を考えることは、研究の進め方を考えることとほぼ同義である。実際に研究を論文やレポートなどの成果物としてまとめる時、研究の流れにそってまとめることも多い。ここでは、さまざまな文献に示された研究のまとめ方から、研究の進め方と併せて研究のまとめ方の例を考えたい。

■ 研究成果のまとめ方

教育研究では、研究の進行と並行してレポート(研究内容)をまとめていくことが多く、したがって、「研究のまとめ方」がそのまま「研究の進め方」となることも多い。

研究をまとめたものは、「論文」「報告」「総説」「著書」「紀要」「レポート」などさまざまに呼ばれている。それぞれの概念や定義を整理することは難しく、従って本稿では、研究の流れや成果を閲覧可能な形に文章化したものを研究のまとめと称することとする。

■ 初任者研修課題レポートのまとめ方から

まず、教育センター研修として提出される初任研課題研究のレポート様式から、研究のまとめの方法について考察する。

先に述べたように、初任者研修教育センター研修では、課題研究の中間発表及び成果発表を行っている。その発表用の提出様式は次の通りである。

中間発表(9月)用

初任者研修「課題研究」の構想

所属校 ○ ○ ○ ○ 学校
職・氏名 教諭・○ ○ ○ ○

1. 研究のテーマ

2. テーマ設定の理由

3. 研究の方法と内容

成果発表用(2月)用

初任者研修「課題研究」発表用レジュメ

所属校 ○ ○ ○ ○ 学校
職・氏名 教諭・○ ○ ○ ○

1. 研究のテーマ

2. テーマ設定の理由

3. 研究の概要

※3月に提出する「初任者研修課題研究レポート」に向けて、現時点での状況を記入してください。

次の表は、この二つの発表様式と、先の研究構想シート[A]～[F]の内容とを対応させたものである。

	中間発表様式	成果発表様式
1. 研究のテーマ	[A]研究主題	[A]研究主題
2. テーマ設定の理由	[B]動機 [C]研究目標 [D]研究仮説	[B]実態 [C]研究目標 [D]研究仮説
3. 研究の方法と内容 研究の概要	[E]研究方法 [F]検証方法	[E]研究方法 [F]検証方法 結果、考察、まとめなど

発表提出様式の記述では、一見研究としてまとまっているように見える研究構想も、ぼんやりとしたイメージだけで記述されているものは、[B]と[C]、あるいは[D]と[F]が整合していなかったり、[F]が不十分であったりすることが、研究構想シートで分析することで読み取ることができる。

■ さまざまな研究のまとめ方から

教員に限らず、一般に生涯で初めて行う研究は、小学校の夏休みの課題として出される「夏休みの自由研究」であろう。自由研究を行う際に小学生に示される研究の進め方・まとめ方について調べたところ、多くの例がほぼ次のようなまとめ方に代表されるものであった。

自由研究のすすめ方

- 1 研究テーマを選ぶ
- 2 研究の計画を立てる
- 3 必要な材料、道具を用意する
- 4 実験・観察・製作を行って、記録をとる
- 5 研究レポートをまとめる

※研究レポートのかきかた

- ①研究の動機（なぜこの研究に取り組もうと思ったか）
- ②研究の目的（この研究で何を明らかにしようとしているのか。
①に含める場合もある）
- ③研究の方法（研究の経過、実験の方法など）
- ④結果（③の結果。データなど）
- ⑤結果の考察（④から何が明らかになったか）
- ⑥反省あるいはこれからの課題

左巻¹⁷⁾による

また、松江・浜田教育センターでは、島根県教育研究会との共催により、教育論文並びに実践記録を募集している。募集要項の前書きに、「島根県教育研究会並びに島根県立松江・浜田教育センターでは、学校教育における充実した研究実践の成果を集め・・・(中略)・・・日ごろ研究実践に取り組んでおられる学校や先生方から多数の応募を期待しております。」と記述されており、「研究実践をまとめたもの」を「教育論文」あるいは「実践記録」として募集していることが読み取れる。

その募集要項¹⁶⁾に記載されている教育論文・実践記録の提出形式は次の通りである。

- 提出形式
- ・ 教育論文・・・論文形式（「主題－仮説－実践－検証」等）で記述されたもの
 - ・ 実践記録・・・学校での実践的活動をまとめたもの

提出形式の説明を見ると、ここで言う教育論文は、「実践研究」をまとめたものであり、実践記録は実践活動をまとめたもの、すなわち「実践報告」であると考えられる。しかし実際は、教育論文として応募されたものが内容は実践記録（実践報告）であることも少なくなく、審査の際に苦慮されるところでもある。

次は、実証的研究や実験的研究の論文構成の例である。この他にも、「序論－本論－結論」としてまとめ、それぞれの内容の詳細についてポイントをまとめてある文献も多い。

- 1 研究主題
 - 2 主題の意味
 - 3 主題設定の理由
 - 4 研究の目標
 - 5 研究仮説
 - 6 研究の構想
 - 7 指導の実際と考察
 - 8 全体考察
 - 9 研究のまとめ
- 野田³⁾

- 実証的研究や実験的研究の論文の項目例
- 1 研究目的
 - 2 研究基盤
 - 3 研究目標
 - 4 基本仮説
 - 5 作業仮説
 - 6 研究方法及び対象
 - 7 研究結果
 - 8 考察
 - 9 結論
 - 10 摘要（または要約）
 - 11 引用文献（または参考文献）
 - 12 資料
- 単に、研究仮説とする
場合もある
- 西田⁶⁾p126



■ 教育研究のまとめ方

これらを踏まえながら、実際に行われている教育研究の実態を考え合わせると、次のような研究のまとめ方が一般的な形であると考えられる。()は各項目の内容を具体的に例示したものである。

どのような項目立てであっても、要は、先に示した諸文献の記述のように、**自分が研究によって明らかにしたこととその経緯を、説得力を持って読む人に訴えることができれば良い**のである。

この説得力を左右するのが、研究結果の因果関係や相関関係をどれだけ明らかにすることができたか、根拠が明確かかどうかなどの検証作業における客観性の有無である。

0 研究主題	研究のタイトル。1～7が総括してあらわされるもの。 (「仲間意識作りにおける登山活動の有用性」)
1 研究の目的	この研究で何を明らかにしようとしているか、何を狙っているか。 (登山によって仲間意識の向上を図りたい)
2 研究の動機	なぜこの研究テーマを設定したか。 社会的・学問的背景、学校の実態や課題、研究の基盤となるもの。 (知り合って間もない者同士の連帯感を強める活動をしたい。三瓶山は登山者の体力に応じたコース設定が可能でありこの活動に適している)
3 研究仮説	この研究の結果についてどのような予測が考えられるか。 1についての指針、ビジョン。1と合わせて記述しても良い。 (三瓶登山によって、仲間意識を持つことができるだろう)
4 研究の方法	1を達成、あるいは3を確認するために、いつ、どこで、誰(何)に対して、何を使って、どのような方策を行うか。また成果をどうやって確かめるか。 (実施月日、登山ルート、グループ編成、アンケート実施)
5 結果	3についてどのような結果が得られたか。 (参加者全員が仲間意識が高まったと回答)
6 考察	5をもたらした理由は何かを分析する。 (つらさを共有し、つらい中でもお互いを思いやったことが、互いの仲間意識を醸成した。コースも体力的・時間的に適当な選択であった)
7 まとめ	1は達成できたか。 研究を通してどのようなことがわかったか、また明らかになったか。 (登山は仲間作り活動として有効である。雨天時の対応を充分にしておく必要がある)
8 参考文献等	引用文献、参考文献の一覧、添付資料など。 (青少年交流の家スタッフの助言、資料、文献)

■ 各項目の記述の仕方

1（研究の目的）、2（研究の動機）、3（研究仮説）を「はじめに」や「研究のねらい」としてまとめて記述することも多い。しかし、その内容が羅列的・情意的な記述である研究は、研究方法・実践も総花的で、実践報告の形になりがちである。

まず、「研究主題（研究タイトル）」は、その研究のキャッチコピーあるいは看板である。従って、研究内容のおおよそがつかめるものであると同時に、読む人が興味・関心を持ちやすい表現である必要がある。

「研究仮説」は、その研究の内容を最も簡潔に、最小限の形に凝縮して表現したものである。「研究仮説」として項目立てされないことも多いが、その場合は「研究の目的」に含んで記述される。「研究の目的」は、「研究主題（研究タイトル）」あるいは「研究仮説」の解説的な内容となるものである。

「研究の目的」についての記述は、ぼんやりした抽象的な「こんな感じのことがしたいと思っている」や、あまりにも広範な社会情勢などに関したことがらを述べるのではなく、あくまでも「目の前の教育課題に対して何をしようとし、何を期しているのか」が具体的に読み手に伝わるように記述する。

■ 研究における考察の重要性

実践後の内容のまとめとなる5～7の「結果」「考察」「まとめ」は、「結果と実践上の課題」というひとくくりで記述されることが多い。しかし、結果と考察、まとめの内容が混同して記述された結果、考察が十分にできず、実践研究ではなく実践報告になってしまう例も多い。

まとめて記述する場合でも、5の結果と6の考察を明確に区分して書き分けることを心がけると、研究の結論としての深まりが出てくる。

考察を充分に行うということは、「実践をやりっぱなしにしない」ということだともいえる。

これは、「授業をやりっぱなしにせず、授業後の評価の検討を充分に行うことが次の指導につながる」という、「指導と評価の一体化」と同様の意味合いを持つ。

教員の多忙な日常では、実践は行うが、その評価や振り返り、結果の考察といった検証作業までを充分に行えないことが多い。研究を行う機会を利用して日ごろの実践を検証し、今後のより良い指導に生かすことが研究の大きな意義でもある。その意味からも、研究が報告でなく研究となりうるためには、実践の根拠ある振り返りが重要な意味を持つのである。

